

Title	中古日本語の文法的な時間表現 : アスペクト, テンス, ムードをめぐって
Author(s)	黒木, 邦彦
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49421
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について〈/a〉をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【33】

氏名	黒木邦彦
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 22614 号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	中古日本語の文法的な時間表現—アスペクト、テンス、ムードをめぐって—
論文審査委員	(主査) 教授 金水 敏 (副査) 教授 蜂矢 真郷 准教授 岡島 昭浩

論文内容の要旨

本論文は、中古日本語のアスペクト・テンスと、ムードの一部の体系について、形態的・統語的・意味的観点から記述を試みたものである。資料としては、平安時代中期・後期仮名文学作品である「落窪物語」「うつほ物語」「源氏物語」を主たる対象としている（これを中古語と称する）。

「目次」「図表目次」「はじめに」「凡例」に続き、第1章「序論」は、1「中古語の文法的な時間表現」、2「研究の目的」、3「研究史概観」、4「先行研究の問題点」、5「研究の枠組み」、6「本論文の構成」の6節を含む。第2章「中古日本語のアスペクト体系」は、1「はじめに」、2「先行研究」、3「研究の枠組み」、4「完了の助動詞の用法」、5「中古語のアスペクト体系」、6「「-つ」「-ぬ」の意味論的特徴」、7「結論」の7節を含む。第3章「中古日本語のテンス体系」は、1「はじめに」、2「先行研究」、3「研究の枠組み」、4「「-き」「-けり」の用法」、5「結論」の5節を含む。第4章「トキ節のATM体系」は、1「はじめに」、2「標準語のトキ節」、3「中古語のトキ節」、4「結論」の4節を含む。第5章「ノチ節のATM体系」は、1「はじめに」、2「先行研究の問題点」、3「調査文献とデータ」、4「量的分布」、5「完了の助動詞の表示／非表示」、6「結論」の6節を含む。第6章「中古

日本語のテンス・ムード体系」は、1「はじめに」、2「最下位助動詞の機能範疇」、3「最下位助動詞のテンス性」、4「中古語のテンス・ムード体系」、5「結論」の5節を含む。さらに、「結語」「謝辞」「参考文献」を最後に置く。B5判17+125頁、400字詰め換算で約420枚に相当する。

第1章「序論」では、研究対象の範囲を「つ」「ぬ」「たり」「り」「き」「けり」とム系助動詞と定め、研究の目的、研究史の概観を述べ、その問題点を指摘し、本研究の枠組みを述べている。第2章「中古日本語のアスペクト体系」では、「つ」「ぬ」と「たり」「り」を含む)および「Ø」(完了の助動詞を持たない述語動詞)の各用法を調査し、結果相およびパーフェクト相の領域では必ず「たり」が表示されること、「つ」「ぬ」は完成相と性格づけられるが、義務的ではなく、即ち文法化されきっていないこと、「つ」には完了の助動詞のほかに近過去時制を表す用法のあること等を述べている。第3章「中古日本語のテンス体系」では、事態時・参照点と発話時との関係から「過去」「回想」「再認識」「気づき」の用法を区別し、「き」「けり」それぞれの領域を明らかにした。第4章「トキ節のATM体系」および第5章「ノチ節のATM体系」では、時の従属節と母型節(論文では「母胎節」と)との時間関係について調査し、第4章ではトキ節と母型節との「テンス・ムードの一致」という現象の存在を指摘、また第5章ではノチ節が相対的テンスを表すのではないこと、中古語では完成性と過去性の相関が強いことを述べている。第6章「中古日本語のテンス・ムード体系」では、「き」「けり」と、ム系助動詞「む」「じ」「まし」「らむ」および「Ø」等が択一的・相互排他的な体系をなすことを指摘し、非現実性、実現可能性、過去性、推量性という尺度によって分類できることを示した。

論文審査の結果の要旨

本論文の最大の特徴は、長い研究史を持つこの分野で独自の的方法論と視点を打ち立てた点に求められる。恣意的な対象の選択、直感的・解釈論的な方法論を廃し、内外の文献を博覧し、従来の研究史で弱かった形態論的・統語論的視点を強化し、取り得る限り高度に厳密な分析を駆使して、説得的な議論を展開している。道具立てとしては、項構造と関連させた限界点の定義、参照点の規定などが新鮮であり、単に新奇であるだけでなく、その効用が本論で十全に発揮されることを示し得ている。

概念装置を確立し、分析に厳密性を持たせた結果、本論では、「つ」の二用法の区別、テンス・ムードの一致現象等、もっと早くに気づかれてもよかった現象をあぶり出すことに成功した。これらに限らず、本論文には、高い評価に値する創見、発見が随所にちりばめられている。

しかしながら、問題点はなお残る。参照点の議論は新鮮ではあるが、その認定法に未だ課題が残り、循環論に墮する危うさを感じさせる。また、対象とする資料が、中古語と言いながら「落窪物語」「うつほ物語」「源氏物語」の三作品等にとどまり、またさらにその

一部であるという点は、本論文の評価を弱める方向に働きかねない。数量調査として成立するだけの用例数は得られているというものの、やはり悉皆調査に優るということではできないだろう。随所に、論述の荒さが目立つのも気になる点である。しかしこれらはすべて、時間が解決する問題であり、今後の調査・論考の充実により、本論文の知見がさらによい方向に補強・修正されるであろうことは十分予見できる。

なお、2009年2月16日に本論文の公開の口頭試問を行い、最終試験を終えた。この点もふまえ、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。